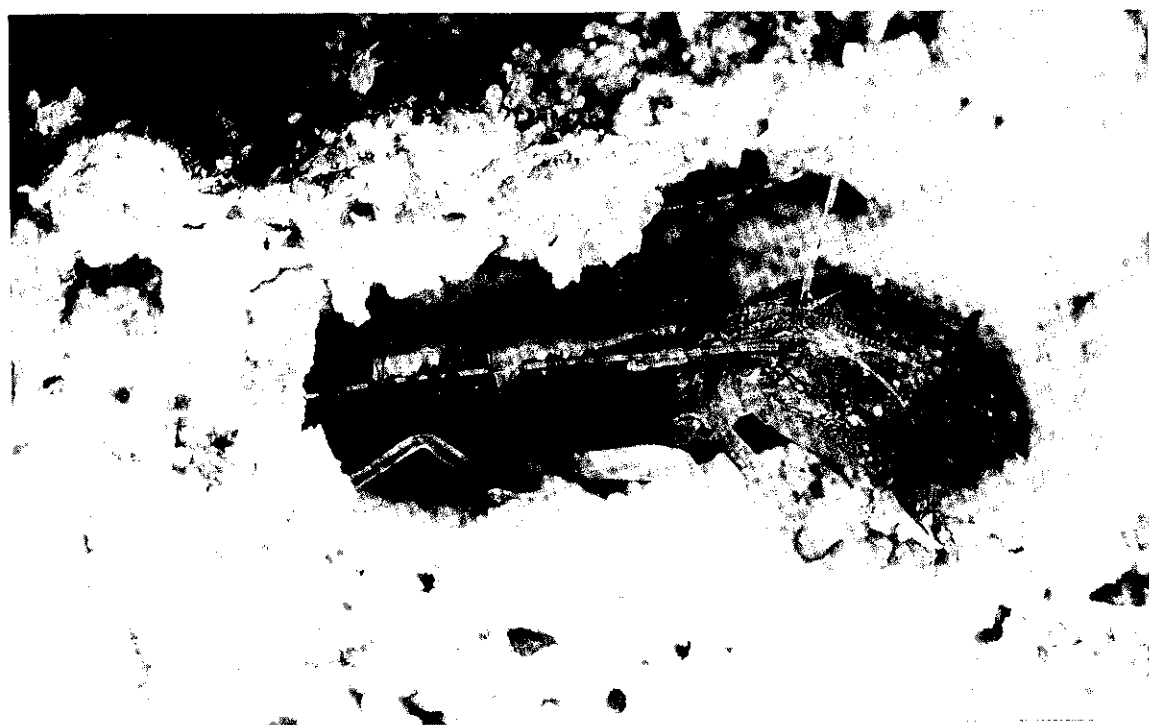


串本海中公園 マリンバビリオン

1997. 10.

Vol. 26, No. 10



キヌゲテッポウエビ
Alpheus deuteropus Hilgendorf

体色は一様に透明感のある褐色を呈し、第2触角の鞭状部には暗色の横帯模様がある。大鉗掌部は長毛が密生し、同部には3つの隆起で区画された3縦溝がある。本種の形態はミツミゾテッポウエビ *A. collumianus* (本紙 Vol. 22, No. 10 参照) に似るが、本種には第3胸脚長節末縁に大きな不動棘があるのに対し後者はこれを欠くこと、後者の大鉗掌部表面は毛が密生せず滑らかなことなどで区別される。通常、サンゴ岩の隙間に生息するが、時に生きたハマサンゴ類にあいた穴から目立つ触角を揺らしているのを見かけることがある。

インド・西太平洋域に広く分布する。日本ではこれまで屋久島以南より知られていた。串本では水深20m前後のサンゴ岩中より2個体が採集されている。写真は、八重山群島黒島の礁原上において、サンゴ岩の一部を割って写したものである。テッポウエビ科。 K. N.

海のうわさ話 (6)

グラスボート発着場に現れるアカウミガメ

宮脇 逸朗

前回の海のうわさ話では瀬戸内海の『浮鯛』現象にも似ている潮岬灯台下の『浮ガメ』を紹介した。この現象からは串本町の沿岸ではウミガメ類の来遊頭数が多いことがおよそ知れようが、当串本海中公園の小さな港にアカウミガメがほとんど毎年のように出現することもその証しの一つになるのではないだろうか。

串本町でのウミガメ類の出現は、『浮ガメ』現象が見られる潮岬灯台下の入り江だけに限られたことではない。その他にも町内の大小の港でアカウミガメやアオウミガメの姿が目撃されることがある。当社の敷地内にも海中公園地区を周遊するグラスボートが発着する小規模な港があるが、ここにも毎年のようにアカウミガメの成体が姿を現し、来園客を驚かすことがある。1990年以降における出現記録によると、港の内外で本種が目撃された年月日、およびその頭数と性別は次のようになっている。

- 1990年6月24日～7月15日
雄・雌個体が出現、個体数不明
- 1991年6月8日
雌個体1頭
- 1992年6月16日
雌個体1頭
- 1993年6月20日
雌個体1頭
- 1994年 (不明)
- 1995年6月15日
雌個体1頭・6月15日以前にも雌個体? が2～3回出現
- 1996年11月13日
雌個体1頭
- 1997年 (10月15日現在不明)

グラスボートの発着場となっている小さな港は間口が約35m奥行き約40mで、土・日曜日と

もなればダイビングボートも頻繁に出入りするなど、およそウミガメの出現が期待できるような場所ではない。当社の港でアカウミガメが目撃されるのは季節的なものとして11月の出現例があるが、その多くは本種の産卵期にあたる6月に偏っている。どうやら産卵期にこの地方で産卵する個体や、あるいは産卵回遊の途上にあるものが何らかの理由で港内に侵入するものと思われるが、その中でも特に記憶しているのが1990年と1992年の出現である。1990年には6月24日から7月15日にかけて連日のように目撃され、港内の水底では本種のものと思われる卵も見つかっている。また、同年は雌のみならず雄個体も現れて7月11日には港の外で交尾らしき行動が確認されたのと、その後の7月13日および15日には港のすぐ横手の小さなジャリ浜で非産卵上陸も起っている。この年に港の内外に出現した雌雄個体のすべてが同一個体であったか否かについては不明だが、同年には少なくとも雄と雌の2頭が現れたことになる。

それに1992年に現れた個体は、港内で姿が見えなくなったと思ったら、大胆にも港の奥部の水深が2.5mほどの水底で休息をしていた。それは海底から遊離した海藻類が波の作用で一つに集められたベッド上でのことで、個体自体は茶褐色の体色が一団となった海藻の色彩とも一体となって紛らわしく見えた。この海藻ベッドと本種の休息との結びつきは単なる偶然の一致だったのかもしれないが、両者の見事な色彩の同化には個体が休息するにあたって外敵の眼を欺くために海藻のベッドを意図的に選択したようにも思われないへん興味深かった。

ところで、今年は10月に至ってもまだ目撃例がない。1994年をも含めて陸上からの目視確認では個体を『見落とし』している可能性も否めないが、本年は本種の産卵が全国的に減少した年で串本町においては皆無であった。こうした状況からは串本近隣海域への来遊頭数が例年よりも少ないことが推測される。従って本年に限っては目撃例が多い6月の出現はもとより、年内の出現についても否定的な見方をしている。

ANTHOZOOLOGIA (68)

花虫類 その38

内田 紘臣

1986年3月(Vol. 15: 15-16)から前回(Vol. 26: 50-51)まで37回にわたって、花虫類の種々なグループの形態などを含め、花虫類の分類体系の変遷をたどった。

花虫類の分類体系における最近の大きな変革の動きが、これらの中から読みとれるであろう。永年にわたって我々が親しんできた分類体系の代表的なものは Vol. 25: 29 に示されている「古無脊椎動物学論・Part F. 腔腸動物」(1956)のものであろう(ただしヒドロ虫綱が鉢虫綱の後に位置しているのを除く)。分類体系における最近の主要な変化は、八放サンゴ類の花虫類全体に占める位置、すなわち六放サンゴ類と対等に亜綱とするべきものなのかどうかという点と、イソギンチャク目の中の分類体系の見直しとの2点である。

これらの点を踏まえて、現時点で著者が最も妥当と考える花虫類の分類体系の試案的なものを以下に示す。(ただし現生種を含むグループのみ)()内は関連する説明がある本シリーズの巻頁を示す。

Phylum CNIDARIA Milne-Edwards

& Haime 1857

刺胞動物門

(= COELENTERATA Frey & Leuckart 1847

腔腸動物門)

(Vol. 20: 58)

Subphylum 1. MEDUSOZOA Petersen, 1979

水母動物亜門

(Vol. 14: 47)

Class 1. Cubozoa Werner, 1975

立方虫綱

(Vol. 25: 77)

Class 2. Scyphozoa Götze, 1887

鉢虫綱

(= Scyphomedusae Lankester, 1881

鉢水母綱)

(Vol. 14: 47 & 25: 29)

Class 3. Hydrozoa Owen, 1843

ヒドロ虫綱

(Vol. 16: 41 & 25: 29)

Subphylum 2. ANTHOZOA Ehrenberg, 1831

花虫動物亜門

(Vol. 8: 35 & 14: 47)

Class 1. Octactinaria Beneden, 1898

八放サンゴ綱

(Vol. 23: 64 & 25: 59)

Order 1. Alcyonaria Lamouroux, 1816

ウミトサカ目

(Vol. 15: 41 & 25: 59)

Suborder 1. Protoalcyonaria

Hickson, 1883

原始八放サンゴ亜目 (2科)

(Vol. 23: 27 & 25: 59)

Suborder 2. Stolonifera Hickson, 1883

根生亜目 (4科)

(Telestacea コエダ類を含む)

(Vol. 23: 27, 24: 10, 58 & 25: 59)

Suborder 3. Alcyonacea Lamouroux, 1816

ウミトサカ亜目 (6科)

(Vol. 23: 27 & 24: 10)

Suborder 4. Gastraxonia

Utinomi & Harada, 1973

腸軸亜目 (1科)

(Vol. 25: 58)

Suborder 5. Scleraxonia Studer, 1887

石軸亜目 (7科)

(Vol. 24: 10-11)

Suborder 6. Holaxonia Studer, 1887

角軸亜目 (9科)

(Vol. 24: 10-11)

(次回につづく)

ブルネイの海 その1

宇井 晋介

ブルネイという国がある。全面積が三重県と同じ位のごく小さな国である。というものの、私自身この国を訪れるまでその存在は、名前しか知らなかった。ブルネイは小さいながらも豊富な石油と天然ガスを産し、特に天然ガスは100%が日本に輸出されるというから、日本とも深い縁のある国と言える。しかしながら、この国についての情報は決して豊かとは言えず、特にその自然についてはほとんど紹介されていない。今回、魚類相の調査でこのブルネイの海を訪れる機会を得たので、2回に渡って紹介してみたい。

ブルネイはカリマンタン島(=ボルネオ島)の、北西部に位置する。調査の話聞いたときは、最初に「これは大変な事だぞ」と、思った。というのも、フィリピン、インドネシア、マレーシア周辺の海は世界でも1、2を争う生物の多様な海で、魚類についても極めて種類が多いと聞かされていたからだ。とにもかくにも半月ほど前から受験生のごとく猛勉強して、機上の人となった。

まもなく空港到着というアナウンスが流れたと思ったら、濃い霧の下すぐそこに家並みが見えた。降り立った空港から見る空はどんよりと鉛色である。もう雨季なのだろうか、まだ少し先と聞いていたのにと落胆していたら、水産局の方が「これはヘイズだ」としきりに繰り返す。どうやら霧と思っていたのは、カリマンタン島南部で発生している多発的な火事による煙らしいことがわかってきた。しかも、聞いてみると、もう3ヶ月以上も燃え続けていると言う。どうやら、南国の青い空と海は今回はお預けのようだ。それにしても、3ヶ月も燃えるに任せるとは、さすがボルネオ、規模が違うと、妙なところで感心した。

到着後さっそく、魚市場と青物市場の見学に



図1. 市場に並ぶボラの一種

出向く。どんな魚たちが獲れているのか、興味津々である。沖縄の市場に並んでいた赤や青のブダイやベラ、ハタなどの原色の魚たちの洪水が頭に思い浮かぶ。ところが、並んでいる魚を見て、すっかり思い違いをしていたことに気がついた。活気はあるが決して衛生的とは言えないタイルの台の上に無造作に並べられた魚は、どれも原色とはほど遠い地味な体色のものばかりなのである。ナマズの仲間、グルクマ、ボラの仲間、サバヒー、ゴマフエダイ、クロホシマンジュウダイそれにテッポウウオやアカメの一種まで、並べられている魚の大半は汽水から川にかけて生息するもので、サンゴ礁に生息するものは、ほとんど見られない。また、エビ類は豊富らしく、ブラックタイガーと呼ばれるウシエビやクルマエビの仲間、それにタイワンガザミなどのカニ類が無造作に山積みされている。これもまた、泥地や砂地を好む生き物だ。どうやら、ここは豊かな海だが、豊かなサンゴ礁の海ではないようだ。その理由は、翌日の陸上調査でわかった。この国の海岸線は、南北に長い、その大半が長大な砂浜なのだ。また、砂浜がないところには、河川が幾つも流れ込んでおり、濃密なマングローブが形成されている。これで、市場の魚の謎がわかったが、調査の方が少々不安になる。

この国の首都は、バンダル・スリ・ブガワンというが、この都市は本来水上に建てられたものである。これは、陸上に棲む蚊によるマラリア対策であったとのことであるが、マラリアが

撲滅された現在でもまだ相当数の市民がこの住宅で暮らしている。ここでは学校もモスクも全て水の上にあり、政府が造ったという新しい水上住宅もある。窓から釣り糸を垂らせば釣りができるという釣り好きな私など一番先に買い求めたいような住宅であるが、車が使えないので最近では若い人は敬遠しているとのことであった。また政府としては、基本的には住民の陸上生活への転換を勧めているとのことで、首都郊外にはおびただしい数の真新しい住宅が建設されていた。しかしながら、外部の目から見ると、住宅建設はジャングルを一見無計画かと思えるほど切り刻んで建設されており、それに比べると水上都市は自然への影響が一番少ない都市のように思えた。もっとも古い住宅ではそれこそ台所のゴミから屎尿まで全て床下へドボンの生



図2. 水上村（対岸）と市民の足、水上タクシー
活らしいので、そうとばかりは言えないが。

海岸地帯を見学する。事前の説明通り、海岸は果てしなく砂浜が続くだけ。そして所々に流れ込む川の両側にはヤシ類とヒルギ類で構成されたマングローブが発達している。しかも西表島辺りで見ると比べると、生育種も規模も遙かに豊かで大きい。この砂浜にはアオウミガメとヒメウミガメ、それに時々オサガメも産卵に上陸するということであった。

しかしながら、砂浜の大部分に長大なT字型の離岸堤が幾つも築かれており、景観は台無しである。また、この構造物は、ウミガメ類の産卵にも影響を及ぼしている可能性も否定できない。市場では、アオウミガメの卵も普通に販売

されており、保護対策はまだ十分でないようである。

調査が始まった。私の経験では国内の調査と言うと、大体が磯やリーフから続く岩礁地帯の事が多く、船で行く場合、「〇〇島の沖合」とか「××岬の東側」等陸上の地形を頼りに行く場合が多いのだが、ここの国の場合は、ほぼ全土に渡って砂浜が続いているだけなので、陸上には目印らしいものはほとんどない。だから頼りになるのは、GPSと呼ばれる衛星航法装置だけとなる。港から沖に向かって1時間ほど走行しても、辺りに島影はない。ただ、ないだ海原がどこまでも続くだけである。串本辺りだと、沖合にこれだけ走れば水深は1000m近くにも達するだろうが、ここでは10～20mほどの浅い海が延々と続く。おまけに水の色が泥濁りのように黄緑色をしている。背後に控える熱帯雨林からの流出水の影響だろうが、南の海のエメラルドグリーンを想像してきただけに、これも少々拍子抜けである。彼方にブイが一つぽつんと見えてきた。ポイントだ。初めての潜水にはやる心を抑えてそっと海へはいる。水深は20m。予想通りの濁り水の中を海底に向かう。おぼろげに辺りが見えてくると、やはり日本国内とは違う着生成物に目を奪われる。一番先に目に付いたのは、刺胞動物のヤギ類だ。日本で見慣れたヤギ類とは形の違う、全体がホークのような形をしたヤギが至る所に生えている。また、ミゾヤギの仲間だろうか、細い針金のような形をしたものがこれまた草原のように密生している所がある。イシサンゴ類は、水深が深いせいもあるが決して豊かとは言えず、被覆型の種が多く目についた。

一つづー

購読料支払方法の変更について

来月号より、料金の支払い方法が変更されます。年間購読料1,500円は、各郵便局備え付けの振込用紙をご使用の上、小誌末ページの番号まで振り込んで下さい。

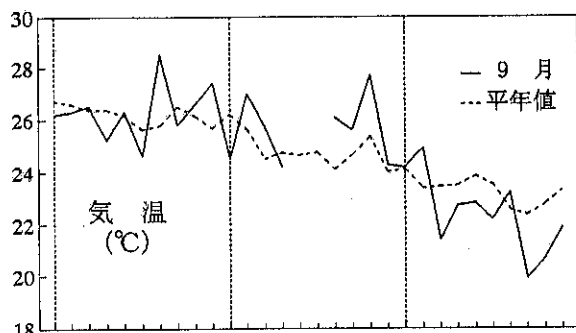
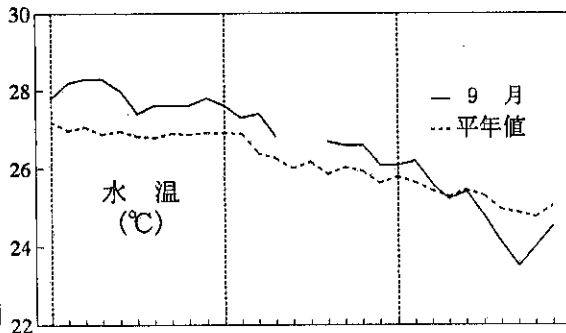
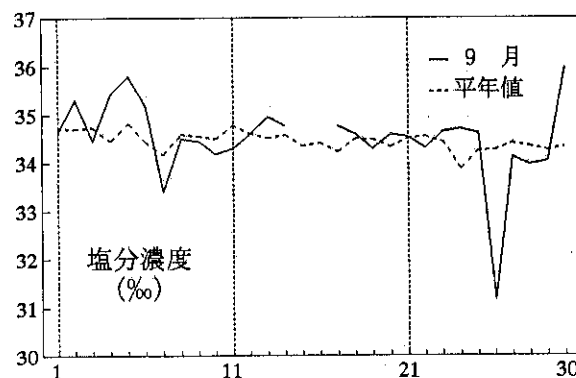
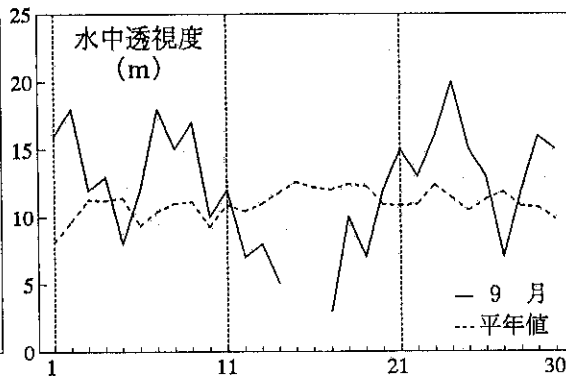
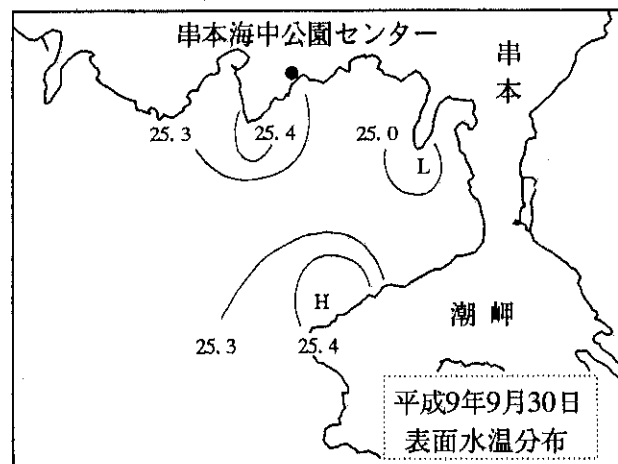
鎗浦の海から

宇井晋介

9月 平均値	気温 24.7℃	水温 26.5℃	塩分 34.5‰
	透視度 12.3 m	月間降水量 282.1 mm	

ブルネイで一番驚かされたのが、都市と自然の距離だ。市内の中心街にあるデパートには、多くの商品が所狭しと並べられ、街は車の洪水だが、目の前にある船着き場から水上タクシーに乗ると、5分も走らないうちに、辺りはマングローブの林、うっそうとした熱帯雨林がどこまでも続く。ここではクロコダイルも出るというから、決して見せかけだけの自然ではないようだ。それともう一つ、ゴミの多さ。南の島へ来たの

だからもう少しましなところで感動しろよと言われてもしょうがない。実際、感動(?)するほど多いのだ。東洋のベニスと呼ばれた事もある水上集落は遠目には美しいが、一步裏へ回ると岸边にはおびただしい空き瓶や生ゴミの山また山。賑やかな雑踏はエネルギーでいかにも東南アジア的だが、このゴミの山もまたアジアのエネルギーの現れか。ふと忘れかけていた「掃き溜め」という言葉を思い出してしまった。



マリンパビリオン Vol. 26, No. 10 通巻 310号

1部 50円 (年間購読料 1,500円)

印刷日 平成9年 10月 20日

発行日 平成9年 10月 25日

口座番号: 00990-9-41351

口座名称: 串本海中公園マリンパビリオン

編集兼発行人

〒649-35 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157

(株) 串本海中公園センター

電話 07356 (2) 4875

FAX 07356 (2) 7170

印刷所

坂本印刷

串本町串本 Tel: 07356 (2) 0895